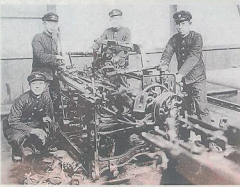
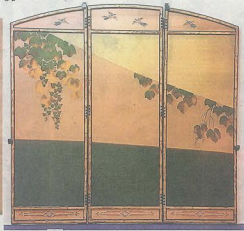


①ベルギー万国博覧会で大賞を受賞したつづれ織の屏風(1930年、市立第一工業学校)②プリント染色の材料や手法を記載した「捺染(なっせん)」サンプル帳(1938年、市立第一工業学校)



下京で企画展

戦前の中等教育の一つ、男子実業学校として、京都市立では第一から第三までの商業学校と、第一の工業学校があった。これらは戦後の制度変更や統合を経て、現在の西京高(旧西京商業部)、洛陽工業高、伏見工業高へと引き継がれるが、その先駆けとして誕生したのが1889(明治19)年

③機械の分解・設計書などで写真に収まる生徒たち(1932年5月)④市立第二商業学校(市立第一商業学校)にあった50メートルプールと、校庭の御土産の斜面を利用した観客席(1931年)⑤1900(明治13)年に河原町通堀池下ルに開設した当時の京都府商業学校



優れた卒論、作品

に設立された京都府商業学校と京都実業講習所だった。

展示では、化学的染色法の普及発展を目指し、京都染業組の講習所として西園院通竹屋町上ルに開設され、後に同組合が幸の財を市に寄付して市立染織学校となる経緯などを、写真パネルを交えて紹介。また、元会津藩士の山本覚馬や実業家の内真吾、郎らが関わり、河原町通堀池下ルに開設した京都府商業学校の沿革なども、当時のイラストとともに振り返っている。

会場には、生徒が記した卒業論文も複数展示されている。その一つ、市立第一商業学校で1921(大正10)年に発表された論文「工支那貿易と我田の覚悟」は、中国が

日本の将来にわたって重要な貿易相手国となる可能性とともに、現地で起きている排日運動の一因が日本人商人の不正行為であると鋭く指摘。当時の生徒たちの国際情勢に対する思慮深さがうかがえる。

この他にも、30(昭和5)年のベルギー万国博覧会大賞を受賞した「つづれ織屏風」(市立第一工業学校)、生徒が模倣をうける「捺染サンプル帳」(同)、市立第二商業学校で校庭(堀北野中)の御土産の斜面を用いた、観客席がとどろる50メートルの風景写真なども見られる。

同博物館の和崎光太郎学芸員(39)は「近代の京都を支え、時代の最先端を歩んでいたかつての学校の姿を、資料を通して見てほしい」と呼びかけている。

入館料が200円。6月14日まで。同日午後5時から和崎学芸員の講演「明治の青年と学校」もある。無料。要申し込み。同博物館075(3)4401(1)0000。

